



Title	国民社会の研究 第13巻
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Issue Date	1961-11-02
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/77618
Type	manuscript
Note	『鈴木栄太郎著作集7(国民社会学原理ノート)』を出版した際のソースとなった原稿である(同書内での言及による)。
File Information	I016_0113.pdf



[Instructions for use](#)

13

本巻中録あり
各論のノトの別コト
現はる本巻は本論コトとして本十四巻に續く

NOTE BOOK

Made of paper

Specially prepared in Japan

國民社会の研究
第十三卷

昭和二十七年二月六日

久美堂特製
¥20



A-NO.3

MUSASHI

13

滑結を家連合の魂

村落の社会関係を採る家連
合と歸す時

(1) 親族
同族

(2) 村
近隣
トナリ
組

(3) 姓と年齢による集團

(3)の關係は他人と他人の關係。

左に家内の位階も力も働く子も思

ひよといふ働かな。坊舎もある。それ

家連合論は何と云ふ村下

1

家を累位として社会同好が殆ど
手が多うとは云へるか、その範圍
に及ぶ可きもの結構構成が
家を累位とするなると云ふ事は

階級、社会連帯、その問題

口民生学における各種機関の
配列と大体的立地関係を以て
地図の上にてそのその活動を
表現する事がある。

これといふ階級や社会連帯や
行動基準の整理、それをどうして
て表現する事があるか。亦これ
そのものは口民生学構造に關係
あるものはあるか、それならこれ等の
のは何の目的であるか。

科学生理学の内容として下の六種は完
全に仲習いした十分なものであるか
味をゆきとする。娯楽は如何
かに社会文化は如何の
形態が単純なものであるか
科学の現象は精微でなければならぬ。
科学形態を凡人は法學の上に構成す。
のてはあふか、生業徳を以て居候
徳を言ふ可きものあり。

口良記字にあけるたにこの記号を理
の取扱ひ

「口良記」の記号生理学の内容をなす
に宗教、道德、法、経済、言語、芸術
の諸現象は「口良記」の既解にあるは
どんな形で取扱はれべきか、あるか
を同記としておられたい。
各線別にその「口良記」における
構造と機能をお示しする。
かゆ要である。「口良記」に於ける
第一「口良記」に於ける道德以下
同様である。

此等の諸現象の自給自足性可認識が要。

空を視る内容の (ビュルケル)

1 宗教 (行初規範文化)

2 道徳 (行初規範文化)

3 経済 (行初規範文化)

a 言語 (生業文化)

b 芸術 (記号的交流文化の内)

行初規範文化

(9)(4)(5)(1)(8)(11)
(6)(2)

余説の

例年構成概図 (鈴木)

1 統治 (了法)

2 保安

3 交通

4 通化

5 販賣

6 社会

7 宗教

8 教育

9 娯楽

b 交流 (言語) (神祕)

a 経済 (商工サービス)

1 宗教

2 道徳 (知識)

4 芸術 (休養)

本基

10 道徳

11 娯楽

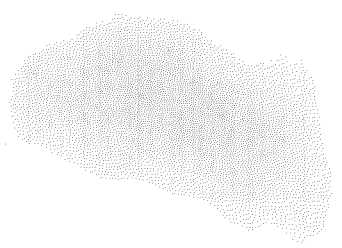
これは前不構成概図よりなく社会構成要素ではない。
消費文化と云ふべき山の
題者よりしてその内容を示す。宗教

力の源泉

この給源が口外にある場合の口泉統治の不徹底と混乱の予実を示す可きこと。

5 商業
6 労務サービス

概図の相なりあり
消費文化
塩のほじめ、砂糖、調味料



テリトリイの回

生活学能学より社会学が学ばるは、
は、^{相利}共生の原理より、^{相利}共生よりテリトリ

イの南出原理である。

^狭占領の

テリトリイの原理は死な生活にも認

可なものか甚だ多く存している。

テリトリイの原理は枯葉にも都市

にも口良に認め可き場合が

多くある。

外員構成

町長

家族主任

村井浩 主任

都節 主任

口民社令 主任

北今生 主任

主任

主任

口民社令研究會設立費

一 研究可建設費 五〇〇〇、〇〇〇

一 人件費十人分年 三、五〇〇、〇〇〇

一 備費 一、〇〇〇、〇〇〇

一 維持費年 五〇〇、〇〇〇

一 購置圖書贈下費 一〇〇〇、〇〇〇

一 初年分書出版費 五〇〇、〇〇〇

港区高輪北町四八

電話 四四一・八二九一、三

アシア財団

ジュンテス

植田誠氏 監行

梅原美子

日本人の將來發展予測の根據

1. 宗教 — コンクリート

2. 都市 — テレトリー (遠) 林蔭口器湖 治安係強

3. 言語 — 言語統制

4. 經濟 — 協力の程度と限界の理論

5. 教育 — 世代的・階級世帯の主任

6. 芸術

予言 (本人の世帯主任の爲) 其の環の形が異なる

此の形は世帯主任の形

自癒 (画氣) 林蔭の出現に因る

1. 予言 (本人の世帯主任の爲) 其の環の形が異なる

7. 協力の程度と限界の理論

8. 日本家族制度の美 (世代的) 皇室の消費力の限界

11

強配、人同愛の体認、人生の終末のふいふい
強配、人の社会、スエーデンのワレリの老人

貞操新論

麦畑で今更なまのり。

ヒハリが鳴る。空から舞いよると階近

の歌から別のヒハリが舞いよってあのヒ

ハリに跳び交し。空中飛網を演ずる。

しほくしと。やれやれ。癒れるのか。麦畑におりる。

又響く。よよと。又。跳び交る。か舞い

上って飛網ルな。そとなる。教団。

勝つ。た方のヒハリが。あけた方のヒハリ

か。その畑を。ねにしつ。き。い。と。と。ろ。に。飛。い

去つた。その時。たしか。メスらしい。一羽の

ヒハリが。そのヒハリについて。一緒。心。を。い

あった。もし。飛。い。た。ら。ん。の。が。あ。か。ら。こ

12

に一結の徳ん下い大越のヒバリでそのか
買けて魔物の振に出かけよのに
あかしの妻のヒバリが共に飛い去つ
たのなりいかんも良しな妻のヒバリ
の徳ん思はぬよ。おいら若い新妻の
ヒバリが義理にやふれへひきさかっ
た時、ここにあかう丹を越ヒバリが若
い越のヒバリも若に出へ行つたのであ
つたら後は何れである。もしさうなら、
あからの越のヒバリは戦ひに勝つて死守
し得たかおやは奪は去らぬたのである。
とに南、勝つて牙が止まり買けたる

か出て行った事はたしかであらう。又出
ていった元の楧に楧のヒバリがフゐつた
事もたしかであらう。出ていったのか
ここにまかい居る元のヒバリであるか、それ
か同じである。何れにしても出て行
った楧に楧がフゐる事は予ぼた
しかで、^{まかい}出ていったのか今までの夫である、
たか、野夫をまかした夫より強い楧
であるのか、^{まかい}まかいよ、ヒバリの楧は
貞節な身であるか、淫婦である
のかの別が決定せよ、それによつて人の妻の
さはりよ

或いは 本能

ト臆部も先天のものが全くは天的
制^{人為的}的のものかの別も昭々かとなす。
人の意のト臆部かもしかしたら、或いは
は幾分かでも先天本能のものがた
しれぬと考えて見よ。為^{心考}草^{心考}九一文
下あ。

四月五日

日後私心に於ける協力の手換
 管理、代官、借、与世具、
 準備、各種、契約、
 支視、照候、教育、指導、
 指導、被、指導、

序 序 序 序 序
 1. 序 序 序 序 序
 2. 序 序 序 序 序
 3. 序 序 序 序 序
 4. 序 序 序 序 序
 5. 序 序 序 序 序
 6. 序 序 序 序 序

生活 生活 生活 生活 生活
 文化 文化 文化 文化 文化
 交流 交流 交流 交流 交流
 生活 生活 生活 生活 生活
 文化 文化 文化 文化 文化
 交流 交流 交流 交流 交流

四月十日

四月十日

117

〇 民生分を不承就構成
 才十卷 P.46
 才十一卷 P.45
 才十二卷 P.20
 右三卷を総合して各章の編成を
 決定す可き事。凡そ何章を
 果す可き事か。

19

987
娣叔宗
樂音

4 2 1
苦造宗
術德那
保知
者識
匠

社会の基礎と経済

一般に社会の基礎と経済の基盤
経済論とは口説き合ひの
社会の基礎と経済の基盤
常規論であるといはれる。

然し口説き合ひの広場は口説き合ひの
集まりの中心は村落
か都市に於ける社会の
外に於ける。村落及び都市は
社会の中心である。

口説き合ひの広場は社会の
中心である。口説き合ひの
社会の中心である。口説き
合ひの中心である。口説き
合ひの中心である。

21
ではあるが、人は常に村務か都府
に居住するものによつて長官に
に所属する。人が直接に
地方の成員と考へられるのは
法律の上で、国家の統治と関連し
て考へられるのである。然り多く
の場合、法律学上の口民権
を認むる者も借用してゐる。
けれども村務にも都市にも是
ら如きの地方自治が、国家の廣域
に認めらるるに至る。結果人は
村務か都府の整理案の司任利

事によつて、とかの川の話より、捕えら
れたら、と、とかの村落か、都の
家以外に、家並のもの、暫く、家か
あゝか。

村落の生活か、都の生活か、で、なつ
て、家並の、口元の生活、だ、い、ま、い
答は、な、い、あ、れ、は、な、い、は、思、な、る、法
文上の、學、作、に、な、さ、な、い、か、村落、も、都
市、も、其、道、の、生活、は、あ、り、得、る。
實際的、な、な、あ、は、凡、そ、記、念、子、な、い
は、口元の、生活、下、ん、な、い、村落、か、都
市の、住民、の、子、の、記、念、子、な、い、と、い、ふ
破、字、の、す、可、な、い、な、い、可、得、基

22

礎理論はほかの如き記号で示されるお
けの理論以外には有し好まない。
強之をへは林蔭のし菊市にも共通
な記号理論以外には基礎理論
と云ふ可きものは無い。基礎理
論は林蔭でも菊市でも認められ
た。理論上の片水は菊市に林蔭
記号学とは別な記号学との認め
た。其の基礎理論とはある等は
無い。

余の社会構造論

余は之を以て見せされる社会関係の
即ち核出せしむるに何より
社会学的意識の第一過剰といふ。
その社会関係は繁盛しては地域の
上に重積して居たが、（戦後の社会に）
これを追及して見たい

都市上は社会関係は地域の
に依りて重積するよりなく、（家族）
族（世帯）の外には職場の
に重積してより見せしむる。
都市上より見ると世帯を単位とする
より重積してより見せしむる。

一は

皇族の外、地方では地域の
都市では戦の上の香積といふ。

故に私は中下村を以ては皇族と地域

関係（自然村）が主要な構造

を以て都市では世帯と職場

が主要な生活の主要な構造を以て

してゐることを示した。

私が希望したのは地方関係の一部を

現地の内におさめようである。

これを何れか主と見てもやめさせぬ

かゝる可なり平利に一切の関係を

を整理して見ようか、此等の所

研究の土環上には必要と思ふたか

9-5

同族團による村落の解決不可能論
同族組織が村落形成の中心である
との考へ方は誤りである

金口のことこの村にも知り同族
團中心の村にも私が述べた村
落構造とは異なりぬ。同族團中
心の村が即ち東北型中に私が
述べた西南型農村と異つた村落
構成を形成を成してなり東北
型と西南型とに分ける事も不
味がある。けれども西南型にも
東北型にも村落としての構造
は私の述べた自然村落の外にはない

東北には古い同族関係が少し多く
残っているところがある。村落
を構成している家数は金の共
通である。だからそれら村落
構成の原則は、東北には
血縁関係の残存を認めらる。
と云ふべきである。村落構成
としては今日一つ自然形
の習性によって出来たものである。
同族組織が村落構成の原則
をなすと云ふのは、多少の事
おかしいのである。

今日の華北の平凡な

私は豊村に於ける北平周辺の
一帯のものを概観に入れよう
地域的関係を明かすよう
にしよう。自然誌の執筆に
あつた。その二は一帯の社会関係が
様々であるが、その中では
さうなものである。その
の辺縁の国境も一層考慮
されるべきである。その上には
かゝる北平自然誌の概念がある。
東北型と西南型と別々の村落
構成の分布があるが、その別は

重要である。けれども村落構成の至
現保而出る共通道下、只東北型に
同族同仕が殊有していよと云う
の事である。共通道の型は自
然村の形態である。同族同仕の
習習は是れに對する厚積の如く
考えるのはよからぬ事である。
日本村落は皆十種の集團の重複
の上にかゝり、三種の部な地区を形成
しその一つの上は自然村を形成し
ていよと云ふ事は南西の柳井村より
東北の村より共通道に立つていよと云ふ事
である。

日本の都市とアメリカの都市

日本の都市は既知人々の村落的進化の
中に於て、我素ちか加はつて行く事
よつて出来たものである。村落の進化
の秩序は大抵の保持され、少くも成
長して行く過程の中、都市は成長
して来たもの、部分的にテリトリーの
原則が乱され、可成り成長して来
たものである。

然るにアメリカの都市は各地より集
まる事元来知の民主制自由人が合衆
的に形成した原素のなかのなか
し、一民主的自治人が加はる事
32

成出して来た
よこの事と
おのれ
記号である。
最初

26

口宗又は統治文化の整理

口宗や統治文化は言語か他人
に先か否か。然に他人は先か
否か。凡そあるは文化がある
であるとも云え。言語はそれか整理
した後より一度も中絶するおなく存
続して来る。益々口宗もその
他の文化も中絶する時期がある
は思われぬ。文化は正かたは歴史を本果し
口宗に中絶かたつたのは直接には
テリトリーの有事で終するものか
すか否かありや。

幕府の徳川家と政権は其の政

権に在りての大統治形、或や方法を以て
た風を継承す。しよひあゝか遠及した
けれ、然らば、江戸幕府の統治構造
世治制即ち江戸幕府の「官徳
文化は明治新政府の官徳文化」と
ん智恵に傳ふべし。いかたしかめ
すけいしやなくぬ。明治新政府の「人
と江戸幕府の「人」といふは、
務引つたかかどんな移り行はれぬか。
直轄の各藩の「官徳」は、その「
形」明治新政府の「地元の」
「行政」を「官徳」

行つたであらう。

同題は統治をうけ母ていた百姓町人等
かゝる見で新政府と旧政府の季代は統
治の内容はどんなな変化をよへたか
狼か、鹿に代つても、兎はとつは
少しも樂になつたとは思へなかつた
ものであつた、空であらう。

職掌と任所の実行の自由は、大抵
方の口良には空半形であつた。新政府
は北海道の準備と開拓の爲に北海道の精
鋭なる者を選び、強制しての移住せしめ
たのであつたか、なうしなへて職掌と任所の

自由の善政の形を遂成した。これは
新政府の大きな運をなめしつゝ

徴兵制の實現は先遣口の制の輸入
であつたとせられ、かゝる舊長官の旧武人
文化の統制力があつたはこそ無事
に後花々を得たとせられぬ。

土地制度の改革も大事であつた。
この改革と昔ハ口良の同の力の新
秩序の枠組が定ぬらぬ。
際外教育の制は旧幕府制の行成慣
習の内より多く金く新しく先遣のより
輸いしむあつた。